

## その 45

### 70 年目の 2 つの舞台



東京都多摩市で上演された「ひめゆりの乙女たち」の舞台からちょうど 1 か月後の 2019 年 3 月 9 日、私は、万葉故地鳥取市のとりぎんホールで、音楽朗読劇「いや重げよごと～愛のもののふ大伴家持」を上演した。

この 2 つの芝居は、それぞれのタイトルが示す通り、前者は沖縄戦を描いた現代劇、後者は万葉集が作られた奈良時代の朗読劇という、千数百年もの時を超えた異質の舞台劇だが、それにもかかわらず、この 2 つの作品は、共通のテーマで結ばれていたのである。

音楽朗読劇は、生誕 1300 年を迎えた大伴家持の記念事業のファイナル・イベントとして、家持が万葉集最後の歌を詠んだ鳥取市の依頼で実施したもので、当日は 2000 席の大ホールがほぼ満席。その熱気に押されて、舞台と客席が一体となり盛り上がり、感動的な舞台となった。見る人の心を打ったテーマの 1 つが、「ひめゆりの乙女たち」の舞台で歌われた軍歌「海ゆかば」だったのである。

この軍歌は、これまで何回か書いたように、戦争中、国民精神総動員週間のテーマ曲として、NHK が作曲家信時潔に委嘱し作曲したもので、作詞は大伴家持とされている。確かに万葉集に収められた家持の長歌から採られたものではあるが、しかし、この詞の部分は、家持作詞ではなかったのである。そこで、劇中、私は家持に次のように言わせた。

「私、家持の長歌のこの部分は、私が作ったのではないのです。これは、代々大君をお守りするもののふの家柄である一族の『言立て』、誓いの言葉で、それを、大仏建立を発願された聖武天皇が、大仏に塗布する金が発掘されたことを寿ぐ詔のなかで述べられたものなのです。その詔に応え、出金を祝賀するために、私が詠った長歌に、その詔の 1 部をそのまま添えたのです。だからこの歌は、元々はお祝いの歌、賀歌なのです。軍歌に使われるような歌ではないのです。軍歌などに使ってはならぬのです」

家持役の狂言師、和泉元彌氏が演じた家持の悲痛な訴えは、見る人の心を打った。

東国の農民たちを、九州防衛のために徴用した防人たちの歌も同じことだった。家持自身が集めた 84 首もの防人の歌のほとんどが、家族とのつらく悲しい別れと残してきた者たちへの切ない思いを詠った歌ばかりだ

った。その内の 1 首、「今日よりは 振り返なくて 大君の 醜<sup>しこ</sup>の御楯と 出で立つ吾は」の歌も、防人たちの切ない胸の内を詠んだ秀歌だが、日本軍は、この「醜の御楯」という言葉を、軍人の教えとして軍国教育に、そして、若者たちを戦場に駆り立てる道具として利用したのだ。

「ひめゆりの乙女たち」の舞台にも、「お国を守る楯になる」とあったように、米軍の沖縄上陸を前に、日本軍は、住民に対し布告を発している。「沖縄人よ（中略）、天皇の醜の御楯となり、一死以てわが郷土を守ることをここに宣誓せよ」

それを受けて、家持は声を絞り出す。

「防人の歌や『海ゆかば』が、そのような使われ方をしていたとは……痛恨の極みとしか言いようがありません。2 度とあってはならぬのです」

詞の問題を別にすると、信時潔が作曲した「海ゆかば」の調べは、極めて美しく荘重、と言ってよい。信時は牧師の息子で、幼児から賛美歌を耳にしていた影響だろうか。戦後、信時は軍歌「海ゆかば」を作曲したことについて一切釈明をしていない。



家持役 和泉元彌

この日の舞台の最後は、万葉集最後の歌であり、家持自身にとっても最後となった歌だった。家持は、万葉集 4516 首の最後の最後を、「いや重<sup>し</sup>けよごと」で終えている。「いや重<sup>し</sup>けよごと」は、「いや重<sup>し</sup>け吉事」で、言うまでもなく、「幸多かれ」である。

「新（あらた）しき 年の始めの 初春の 今日降る雪の いや重<sup>し</sup>けよごと」

そう言えば、前回の「ひめゆりの乙女たち」で紹介した太田少尉作詞の「相思樹の歌」の最後も「幸多かれ」だった。卒業式の日に歌う予定だったものが禁じられて、代わりに歌ったのが「海ゆかば」で、ひめゆり学徒隊が最後に皆で歌った別れの曲が、「相思樹の歌」だった。この最後の言葉も、ひめゆりの乙女たちと太田少尉からのメッセージだったのだろう。

「過ぎし日の 思い出秘めし 澄みまさる 明るきまみよ 幸多かれと 幸多かれと」

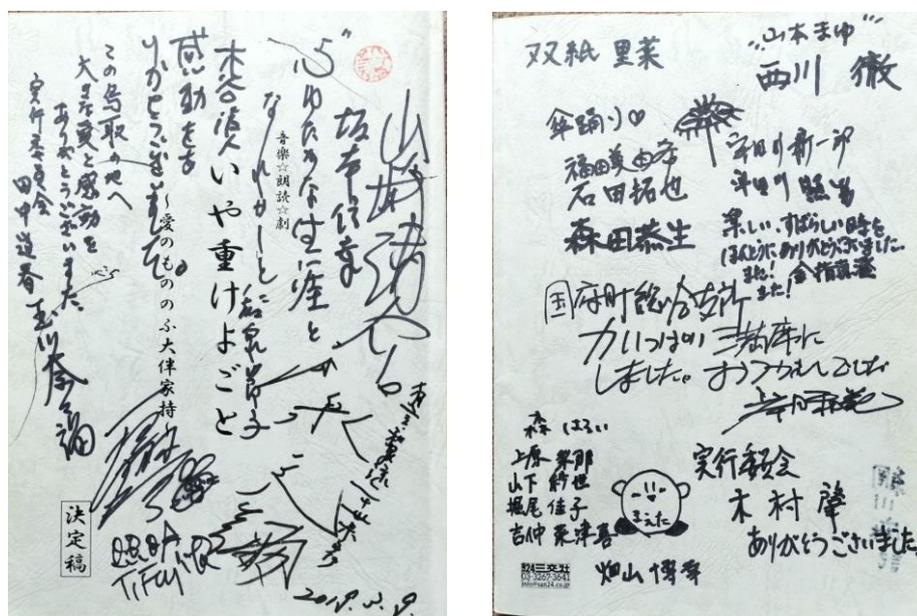
歌の最後を、「幸多かれ、幸多かれ」とリフレインして終えている。

家持の悲痛な訴えは、観客の皆さんにも 1 つのメッセージとして伝わったようで、終演後の観客アンケートからも、それが伺えた。「万葉集に込められたメッセージを胸に刻む」、「家持の最後の詠は永遠の平和を詠んだもの」、「家持へのイメージが変わった」、「時を超えた家持のメッセージ」、「若い人を戦争に行かせないようにというメッセージに、多くの人が涙を流していた」、「1300 年の愛をもらった思い」、「記念すべき 1 日となった」、「目からうろこが落ちた」、「感動、感激、感銘」、「宝ものをもらった思い」など等 80%近い方々が

「大変良い」、「良い」と評価してくれた。

何よりうれしかったのは、ともに公演の実施に当たった仲間の皆さんの反応だった。お客さんの声に「宝物の  
をもらった思い」とあったが、私こそ、この日終わってから、何物にも代えがたい「宝物の」を1つもらった。

それが次の写真である。何を写したのかお分かりだろうか……単に紙に書きたいはず書き……？



私の当日の台本である。左がその表紙で、右が裏表紙。表紙には芝居のタイトル「音楽☆朗読☆劇 いや重けよごと〜愛のものふ大伴家持」と印刷されているのだけれど、ほとんど気がつかない。わずかに、左下に、**決定稿**、右上に、私の朱印がうすく見えるだけで、あとは舞台の関係者の皆さんのサインである。表紙に書ききれなくて台本の中まで全部で 50 人を超えている。今回の公演の主催者である家持生誕 1300 年記念事業実行委員会会長は、署名の脇に「ありがとう」とあるが、お礼を言うのはこちらの方である。3 人の副会長は、「この鳥取の地へ大きな愛と感動をありがとう」、「何より台本に共感」。入場券の販売や集客、当日の対応に当たってくれた鳥取市や文化財団の方々は、「力いっぱい満席にしました」、「鳥取を忘れないで」。出演者やスタッフの皆さん、「万葉集、ずっと大事にします」。この公演の仕掛人の金指万葉歴史館館長は、「楽しい、素晴らしい時をありがとう。また！また！」と、最後の、「また！また！」がなんともうれしい。

それからちょうど 3 週間後のことだった。2019 年 4 月 1 日、思いがけないことが起こった。万葉集由来の新元号「令和」が発表されたのである。そして、降って湧いたような突然の万葉集ブームである。言うまでもなく、万葉集由来の令和の影響であり、まさに新元号効果である。書店では、それまで古典コーナーの片隅にひっそりと置かれていた万葉集関連本が、今や店頭で平置きされている。雑誌や新聞紙上では、令和論や万葉論が喧しかった。

これまでは、自称「万葉集宣伝係」として、万葉集について書いたり、話したりしても、誰もほとんど気にもと

めてもらえなかった。それがどうだ。この実績も権威もない「万葉集宣伝係」にも、数件講演依頼が舞い込んでくることになったのだから、世の中というのは変われば変わるものである。

「令和」については繰り返し書かれているように、太宰帥大伴旅人が催した梅花の宴の詞書（万葉集 第5巻）からの引用である。

「初春の**令**月にして、気淑（よ）く、風**和**らぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす」

おめでたいことでもあり、「令（うるわ）しき、良き和の時代に」という思いのこもった良い年号、というのが、大方の反応のようだが、識者が指摘するように、「令」の主意は、「言いつけ、命令、掟、則、地方長官、次官」等で、「麗しい」とか、「良い」という語釈は、どの国語辞典も 4～5 番目以降にしか出てこない。まさにその通りで、古代文字を見てみると、それが明白だ（本稿の「その 2」参照）。令の冠は、「人を集める」、その下は（足と言うらしいが）、明らかに人が膝をついている絵だが、「ひざまづいて頭を垂れる」、つまり、「人を集めて従わせる」のが、この「令」の意である。これは言語学者白川静氏の『常用字解』によるが、「地球ことば村」の言語研究家小林昭美氏も、「令和の『令』の原義は確かに命令だと思われる。『うるわしい』と読むのは、『令』が『麗』と同音だからであり、当て字だろう。中国の音韻学者、王力は『同源字典』のなかで『音近ければ義近し』としている」と言う。

令和という新元号を初めて耳にした時、この「令」の 1 字を使った記録があったことに気がついた。しかし、何の記録だったか思い出せないでいたが、しばらくして突如脳裏に浮かび上がってきたのが、昭和 38 年刊行の『神風特別攻撃隊の記録』だった。その記録の頁を繰って、その部分を探し出すことができた。

くかねて大西長官が残していった水筒の水を蓋に受けて、各搭乗員が次々に飲みほして別れの盃とした。その時だれからともなく、「海ゆかば」の曲が歌い込まれ、（略）合唱は低く流れて行った。やがて、出発の「令」が下ると、搭乗員は戦友に見送られて飛行場におりて行った。いよいよ出撃である>

ここに記録されている、出発の「令」である。大西長官とは、言うまでもなく、特攻隊を創設した大西瀧治郎中将のことで、中将が残した水筒の蓋を別れの盃として、最後に軍歌「海ゆかば」を歌った後、出発の「令」が下って、関行男大尉を隊長とする神風特別攻撃隊は出撃。4 回目に出撃したレイテ沖海戦で米空母に突撃して散華した。関大尉は 2 階級特進し中佐となり、「特攻第 1 号」として華々しく発表され、軍神と称えられた。

このくだりを覚えていたのは、別れの水盃が盃や茶碗ではなく、水筒の蓋だったこと。しかも 4 回の出撃、つまり、その別れの盃を 4 回もやらざるを得なかった若者たちの心中を察するあまり忘れ難かったこともあるが、私が「令」を思い出すきっかけとなったのが、この記録の中の軍歌「海ゆかば」だった。まさに、「令」と「海ゆかば」が、直接結びついていた特攻隊の記録だった。

この新しい令和の時代が、家持の父、大伴旅人が「梅花の宴」の詞書に書いたように、「令しい和」の時代になることを祈念するほかない。軍歌「海ゆかば」の時代を、2 度と繰り返してはならない。

それから1年近く後……何より嬉しいニュースが飛び込んできた。

「ひめゆりの乙女たち」に出演したHさんは、翌2020年2月多摩平和まつりで行われた劇「ぞう列車よ走れ」に再び出演、サーカス団の団長を好演した。それからしばらくして、そのグッドニュースは、Hさんからもたらされた。「今年の公演が終わった後、来年の企画の相談になったのですが、それまで時々話していた童連のことが話題になり、それで来年の劇のテーマは『童連』に決まったのです。思いがけない展開でしたが、ありがたいことです。秋には脚本作りに取りかかるそうです」

戦後甲府の教師たちが草1本もない焼野原に咲かせた花を、70年後に多摩の教師たちが引き継ぎ、スマホ時代の子供たちに「文化の花束」をプレゼントする、これは70年という時空を超えた教師たちの劇的な連携であると言っても過言ではないだろう。

戦時中「相思樹の歌」を作曲し、女学生たちとともに絶唱しながら死んだ沖縄の教師。敗戦後何の楽しみもなくなった子どもたちに「文化の花束」を贈った甲府の教師たち。戦後70年を過ぎてなお、子どもたちと平和劇の制作を続けている多摩市の元教職員。そして、小中学校の教師となって演劇指導に当たったり、今も童連の歩みを記録し続けている童連OB。教育の荒廃が言われて久しいが、過去に、そして現在もなお、それとは無縁の世界があった。

「70年目の2つの舞台」は、そんな教師たちの願いを、時空を超えて引き継いだものであり、もしかしたら、天上の花束から流れ落ちた2輪の梅の花だったのかもしれない。「梅花の宴」で詠まれた旅人の絶唱である。

「我が園に 梅の花散る 久かたの 天より雪の 流れ来るかも」 大伴旅人（巻5・822）



そして、多摩市での「童連」の舞台が決まった同じ頃、私たちもまた万葉集ブームに気を良くして、家持の舞台を、念願の東京は浅草公会堂で公演することを決断した。そこで、ほぼ同じ年に、同じ東京で「万葉」と「童連」という2つのお芝居が上演されることになるのだが、またまた波乱万丈、思いがけない出来事が出来し、予想外の事態に陥ることになる。

その経緯は、「そして、奈落に墜ちた、が……」として、2021年11月発行の『文芸』誌上を書くことになるのだが、それは、来月ここに転載して紹介することにしたい。

